

人が生きる世の中を創る

2010年9月修了生

大藪 崇

(株式会社エイトワン代表取締役)

私は、愛媛に育ててもらった人間です。
起業をしたのも愛媛を盛り上げるためです。

出身は広島ですが、愛媛に来てから18年、起業してからは9年経ちました。
私は今36歳なので、人生の半分を愛媛で、そしてその半分以上を起業家として生活していることになります。このキリの良さを考えると今年は節目の年なのかもしれません。何の節目かは意味不明ですが、とりあえず前向きになれる要素を探すのは大事なことだと思っています。

愛媛大学では典型的なダメ学生として多くの方に叱咤激励を頂き、卒業してからは株式投資で自身の欲求を追求するのみという、地域貢献とは程遠い道を歩んできました。そんな私ですが人生とは不思議なもので、最近地方創生について聞かれることが増えてきています。更には大学での講義や地域でのセミナー等に呼んで頂き、若者たちにメッセージをお願いされることもあります。自身の経験上、遊んでください、としか言えないのですが、そんな自分にある種の違和感を抱いているのが正直なところです。

元々、正義感が強いわけでも、リーダーシップがあったわけでもありません。愛媛を盛り上げたいと思ったのは、ある程度自分が満たされたからです。このある程度というのが曲者で、私は株式投資で運良く15億程の利益を得ることができましたが、お金を得ることだけではある程度のラインを越えることはできませんでした。より充実した楽しい人生を送るにはどうしたら良いのだろう？その時頭に浮かんだのが愛媛を盛り上げる、ということでした。

なぜそう思ったのかはよくわかりません。敢えて理由を探すとすれば、それは人間の本能だからだと思っています。世の中をより良くしたい、より便利にしたい、より面白くしたい、その積み重ねが人類の歴史であって、私にとっての表現方法が愛媛を盛り上げたいということだったのだと思います。誰もが思うことではありますが、ある程度の余裕が引き金となって私を一步前に押し出してくれたのだと感じています。

その時感じたのが自分の無知さです。愛媛を盛り上げるために単純に愛媛一の観光地である道後温泉を盛り上げたいと思い、まずは道後で宿泊業に取り組むことにしました。そして、実際に

人が生きる世の中を創る

旅館経営をスタートしたものの、当然ですが私には経営の知識も旅館業のノウハウも全くありませんでした。これはやばいと感じて、経営の知識を習得するために門戸を叩いたのがSBI大学院大学でした。

念願叶って入学させて頂き、色々な勉強をさせて頂きました。その中でも圧倒的に印象に残っているのが「良い人間でなければ良い経営はできない」ということです。それまでの私は経営に対して物凄く高いハードルを感じ、様々な経営スキルを習得した特別な人間でなければ結果を出すことはできない世界だと思っていました。でもそれは違うんだと。十分条件ではあるが、必要条件ではない。良い人間になら自分も努力次第でなれるのではないか？そういった思いに至り、経営に対する漠然とした不安と迷いを吹っ切ることができたのが一番の収穫だったと感じています。

迷いが吹っ切れたので後は前進あるのみです。その後愛媛を中心に色々な事業を立ち上げ現在今期予想で売上31億円、従業員数もパート含めて400名ほどになりました。愛媛を盛り上げるという思いをベースに、愛媛の地域資源を活用したビジネスが多く、今治タオルや砥部焼、みかん等をブランド化して全国に発信しています。そういった展開が昨今の地方創生の流れとマッチしていたのか、様々なメディアで取り上げて頂く機会も増えてきました。

ただ、私自身最近ひしひしと感じているのですが、地方創生とは私達が今までやってきたような地域資源を活用してビジネスを生み出すことが本質ではなく、これからの地方に生きていく新しい働き方や生き方のスタイルを生み出していくことが本質ではないかと思っています。

今地方では働く人がなかなか見つかりません。そして、年々その傾向は強まっています。もちろん景気が良いわけではないので、景気が悪いのに人手不足なのです。要するに雇用を生んで景気を刺激するという今までのやり方が通用しない時代に突入しているわけです。あらゆる規模が縮小傾向にある中で、今まで通りの供給をしようとしている所に無理が生じてきています。

今、ほとんどの日本人が、これから迎える超高齢化社会に不安を抱いて生きています。色々な理由があると思うのですが、結果としてこのような未来しか描けていないということは何かの仕組みが決定的に間違っているということだと思っています。そこに目を向けずに間違った仕組みの中で努力しても根本的な解決にはなりません。私の今のミッションはその何かをより良い形に変えていくことです。具体的には働き方や生き方ではないかと感じています。いわば地方の現状はこれまでの間違った仕組みの集大成であり、そこから学び、これからの世の中に必要とされる形を提案していくことが何より大切だと感じています。

ここからは推論でしかありませんが、今の世の中に決定的に不足しているのが活力だと感じています。一人一人が活き活きと使命感を持って日々生きることができる環境作りが急務だと考えています。

現状を批判しても何も生まれないので、私達が現実に関わり合っているのは、国や会社に頼るのではなく、自らの責任で人生を切り開く覚悟を持った人をたくさん輩出していくことです。取締役という立場で人生を掛けて勝負していく人を全力で応援し、一緒に成長していくことに主観を置いて取り組んでいます。現在、9 社子会社を設立し、代表を含む取締役の数は 24 名となっています。また正社員の中にも独立予備軍が 10 名ほどいるので、近い将来グループ全体に占める正社員と取締役の数は 1：1 くらいになる予定です。

これからの地方は年々経済規模が縮小していくので、雇用を生み出すための何かを無理に作る必要はありません。それよりも人に焦点を充てて、人をベースに事業を創っていくことがとても大切だと感じています。規模の追及をする必要もありませんし、今までのような募集すれば人が集まることが前提の拡大戦略は難しくなります。その代り生産性が重視され多様性が受け入れられるのではないのでしょうか。年商 100 億の会社を 1 つ作るよりも年商 1 億の会社を 100 個作るアプローチの方がこれからの地方にマッチしていると感じています。

そのベースになるのはあくまで人です。今弊社では、社内の人間・外部から応募があった人間問わず、その人がやりたいことで一生生活していけるように一緒にビジネスを考えています。そして、ある程度ビジネスモデルが固まった段階で子会社代表として独立してもらっています。こうすることによって、やる気のある人がいる前提で事業がスタートしているので人の心配をする必要がありません。

結果として地域資源を活用したビジネスが多くなっていますが、事業部制で会社側がビジネスを考え、人を募集していた頃と比べ、当事者の活力の差は歴然としています。壁を突破するためのアイデアが自ずと出てきます。他人事か自分事か、やらされているのか自らやりたいと思っているのか。極論すればこれだけの違いです。これだけですが、日本の活力が失われた大きな理由は他人事の人間が増えすぎたからだとリアルに感じています。

もちろん私達のアプローチが正しいかどうかはわかりません。ただ手応えと可能性を感じているのも事実です。規模の拡大を目指すのではなく、情熱が薄まらない規模の組織で最大限の生産性を目指す。小さいけれど高収益で本人たちが最高に人生を楽しんでいる。そんな組織の集合体を創りたいと思っています。

人が生きる世の中を創る

愛媛を盛り上げることが事業のスタートでしたが、今の私のミッションは人が生きる世の中を創るということです。生き活きとした人が集まることによって、自然と町は元気になります。そして、それは力技のアプローチではなく、自然発生的なものでなければ継続性が期待できません。人口が減っていくからこそ、人がいないと何もできないという当たり前のことに気付かされ、一人一人の価値が改めて見直される。それはある意味必然なのかもしれません。